

な運動体では可能であった自由で親密なメンバー相互の関係（霊的な自由）は、制度化の中で一定の硬直化をよぎなくされる（形式主義、官僚性）。また、イエスの宗教運動の理念に関しても、変更が生じる。

この変更は、共同体の制度化が、共同体外のより広い社会（世俗社会）との相関性に規定されていることによるものである。外部環境が階層構造をもつ場合、制度化は階層化への圧力となる。

4. 制度批判＝反動：数世紀の一回の頻度で発生、民衆運動、異端

制度化の進展はそれに対する反動を伴わざるを得ない。霊的自由への要求が制度を突き破り、民衆運動にまで発展する例を、我々はキリスト教史において繰り返し見いだすことができる（2世紀後半のモンタノス運動など）。

5. 迫害

66(ネロ帝)、95頃(ドミティアヌス帝)、249(デキウス帝)、
303(ディオクレティアヌス帝)

制度化の進展の時代は、キリスト教会が外部の強大な政治的力によって迫害を受けていた時期に対応する。迫害期を生き延びることができたという点から判断するならば、制度化は成功したと評価できるであろう。迫害にもかかわらず、キリスト教は地中海の諸都市に急速に広がって行き、キリスト教は地中海世界の都市の文化状況に適応した宗教へと変貌を遂げてゆく。

- ・キリスト教の制度化は着実に進行 → 正統教会への道
- ・古代地中海世界の都市の文化状況への適合 → 都市型宗教としてのキリスト教
ギリシャ語で書かれた新約聖書原典！

6. キリスト教迫害（ユダヤ教とローマ帝国からの）への対応

キリスト教は、外部からの迫害に対して、次の二つの仕方で対処した。

(1) 弁明（弁証）→ キリスト教思想の形成

ギリシャ的教養を身につけた論敵の議論（キリスト教は反国家的反社会的な危険宗教である、キリスト教の教えは処女降誕や復活といった迷信であるなど）と同じ知的水準で相手を論駁し、自らの立場を説明することは、キリスト教思想の形成に決定的な影響を及ぼした。弁証神学はキリスト教神学の母体である。

→ 学問としてのキリスト教神学の成立

キリスト教の弁証と議論の基盤としての自然神学

(2) 国家批判：ローマ帝国＝サタンの王国

キリスト教は弁明を行うだけでなく、迫害者への批判を展開した。ヨハネ黙示録は黙示文学の代表的文献であるが、抵抗文学としての黙示文学の特質をみごとに表している。

<引用聖書>

ヨハネ黙示論

17:5 その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは、「大バビロン、みだ

らな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名である。17:6 わたしは、この女が聖なる者たちの血と、イエスの証人たちの血に酔いしれているのを見た。この女を見て、わたしは大いに驚いた。17:7 すると、天使がわたしにこう言った。「なぜ驚くのか。わたしは、この女の秘められた意味と、女を乗せた獣、七つの頭と十本の角がある獣の秘められた意味とを知らせよう。

20:1 わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。20:2 この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、20:3 底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。20:4 わたしはまた、多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた。わたしはまた、イエスの証しと神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。20:5 その他の死者は、千年たつまで生き返らなかった。これが第一の復活である。20:6 第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。20:7 この千年が終わると、サタンはその牢から解放され、20:8 地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとして出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。その数は海の砂のように多い。

(2) 公認・国教化とキリスト教の転換

1. キリスト教の公認と国教化

313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）、325：ニケア公会議、381：コンスタンティノポリス公会議、392：国教(テオドシウス帝)

2. 政治的秩序と宗教的秩序の相補性 cf. 近代的な政教分離

4世紀に地中海世界のキリスト教を取り巻く状況は大きく変化する。ローマ帝国によるキリスト教の公認から国教化への動きである。古代より、政治と宗教とは緊密な関わりがあり、両者は相互に補完し合う関係にあった。宗教思想は政治思想という側面を有していたのである。キリスト教は初期の迫害下においてその基本的な教義と制度を形成した関係上、現代に至るまで、国家批判的な契機を明確に有しているものの、国教化にいたる中で、大きな転換を迎えることになった。ヨハネ黙示録的な国家批判はそのままの形では保持できないことになる。

3. 国家神学・政治神学としてのキリスト教神学

キリスト教が自らの中より学問的な神学を構築する際に、すでに神学はギリシャ的学として存在していた——ストアの神学体系（神話・民衆神学、ポリス・国家神学、自然・哲学的神学）——。キリスト教神学は、この三類型の神学のいずれにも関連すると同時にいずれか一つに還元できない新しい神学類型として登場することになる。その中心は、キリスト論あるいは三位一体論に求められる。

4. 絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。

キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。

国家の固有の任務として外交と戦争が挙げられるが、古代から現代に至るまで、国家にとって戦争遂行は重要な問題として存在してきた。国教としてのキリスト教は、この国家の戦争遂行について、全面的に否定するのではなく、正しい戦争と不正な戦争の規準を明確化する仕方で、国家の戦争遂行を一面ではチェックし、一面では正当化する役割を担うことになる。これが、古代末期の代表するキリスト教思想家（アンブロシウス、アウグスティヌスら）の課題となった。

この神学思想の展開は、古代から中世へ、そして現代へ至るキリスト教国家論を規定するものであって、その中より、聖戦論が登場することになる。以降、キリスト教においては、絶対平和思想、正戦論、聖戦論が緊張関係において並存することになる。

「四世紀終わりから五世紀初めにかけて、キリスト教は、忍耐から確立へと変遷した。伝統的なローマの祭礼は国の支持を失い、皇帝たちは、キリスト教の神をローマの運命の保証人として頼りにしたのだった。ミラーノの司祭、アンブロシウスはローマ皇帝にユダヤの王という聖書のイメージを適用することによってこれに答えた。ヒッポのアウグスティヌスは、キリスト教徒の支配者による戦争の遂行を正当化した地の国と神の国の相互補完の理論を展開した。」（参考文献5．162頁）

<参考文献>

1. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』世界思想社
2. 上智大学中世思想研究所編訳／監修 『キリスト教史 全11巻』平凡社ライブラリー
3. アウグスティヌス 『神の国』岩波文庫
4. R.A.マーカス 『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館
5. J. ヘルジランド、R. J. デイリー、J. P. バーンズ
『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館
6. 宮田光雄 『平和の思想史的研究』創文社
『平和のハトとリヴァイアサンー聖書の象徴と現代政治ー』岩波書店
『非武装国民抵抗の思想』岩波新書
7. シュミット 『政治神学』未来社
8. J. モルトマン、J. B. メッツ 『政治的宗教と政治的神学』新教出版社